

第76回日本皮膚科学会中部支部 学術大会を終えて

(2025年10月25日・26日)

※国立京都国際会館とWeb配信のハイブリッド開催

加藤 則人

京都府立医科大学北部キャンパス長

はじめに

第76回日本皮膚科学会中部支部学術大会を京都で開催しました(図1)。ご参加・ご協力いただいたすべての方々に心から感謝申し上げます。会場の国立京都国際会館は庭園の木々の葉も色づき始めており、少しだけ秋の京都を楽しんでいただけたものと思います。

テーマ

この学術大会のテーマを「皮膚科学の未来に向かって」にしました。近年、医学は飛躍的な進展を

遂げ、その研究成果をもとに多くの皮膚疾患に対して、私が皮膚科医になった35年前には想像もできなかった新たな診断法や治療法が開発されました。しかし、診断できない皮膚疾患、うまく治療できない皮膚疾患は、まだ数多くあります。また、新たな課題も生じています。

今後も皮膚科学が発展し続け、これらの皮膚疾患の診療や研究での課題を解決していくためには、社会や先輩たちから与えられたものに自らが経験したことや生み出したものを加えて、後輩や未来の社会に引き継いでいくことが必要だと考えています。この学術大会がそのような機会の1つになることを願って、講演やシンポジウムなどを企画し



図1 さまざまな領域のエキスパートに登壇いただきました

ました。

プログラム

自己免疫性水疱症の未来を切り拓いた慶應義塾大学皮膚科の天谷雅行教授の特別講演は、これまでの研究の歩みに加えて、若い皮膚科医に向けて皮膚科学にとどまらず医学の未来を切り拓きグローバルに展開することの大切さを熱く語る、圧巻の内容でした。ドイツ・ボン大学皮膚科のThomas Bieber教授には、アトピー性皮膚炎の診療での課題と、それを解決するための未来への道筋を示していただきました。

私を含む平成元年(1989年)卒業の同期皮膚科医5人によるシンポジウムでは、それぞれの専門分野である水疱症、皮膚悪性腫瘍、アトピー性皮膚炎、血管炎、乾癬の「これまでとこれから」について語り合いました(図2)。

シンポジウムや教育講演では、それぞれの領域のエキスパートに最新の情報やスキルを披露していただきました。最近、皮膚科の勉強をする機会が減っていることを自省していましたが、数多くの一般演題では若い皮膚科医の方々の発表から大いに学ばせていただきました。

お楽しみ

コロナ・パンデミックの数年を経て感じるのは、学会の会場で共通する興味や目標、課題などについて参加者同士で語り合うことの大切さです。学会で知り合った国内外の仲間たちは、私の生涯の財産になっています。そこで、本大会の懇親会ではあえて会長の挨拶や乾杯の音頭などはすべて「なし」にして、参加者同士で大いに「懇親」を深めていただくことにしました。当日は、あいにくの雨天で会場の庭園には出られませんでした。皆様が天橋立ワイナリーのワインを飲みながら歓談しておられる様子を拝見してうれしく思いました。余談ですが、国際会館のスタッフが気を利かせて(?)プロ野球・日本シリーズ第1戦のテレビ中継を懇親会場のモニターでみられるようにしてくださり、



図2 同期皮膚科医5人で記念撮影

左から川上民裕先生、奥山隆平先生、筆者、青山裕美先生、森田明理先生



図3 行列店「出町ふたば」の名代豆餅

阪神タイガースを愛する仲間がモニター周囲に多数集まって、(私には)さらに楽しい時間になりました。

ドリンクサービスのコーナーでは、京都府立医科大学にほど近い行列必至の「出町ふたば」の名代豆餅(図3)をはじめ、京都の和洋スイーツが好評でした。

おわりに

2026年は、第42回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会(7月10日・11日、みやこめっせ)、第56回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会(12月18日～20日、国立京都国際会館)を開催します。皆様のご参加を心からお待ち申し上げます。